

研究の栞

日本古建築研究の栞 (第十七回)

工學博士 天 沼 俊 一

第二十五 花 瓦 (下)

瓦 當 文 様

二、蓮花唐草——菊水唐草

爰に蓮花唐草といふは、中心飾として必ず横向きの蓮花があり、其左右からは前代より繼承せる唐草が出て、夫れに花や蕾等がついてゐるのを指すのである。そしてこの中心飾たる蓮花が菊花に變り、唐草中の卷鬚が水になつたのを菊水唐草と呼んだのである。

蓮花唐草は平安後期に出來た様である、少なくとも遺物からはさうである。此れは圖示しなかつたが、中央に満開の蓮花を斜に——丁度醍醐寺五重塔初重内部裝飾文様中にある暈の蓮の様なものを——つけ、兩方に出た唐草の兩端に近く蕾がついてゐるものである。

次に第百〇二圖に就て記載を試みるが、此の圖に示せる十圖の内①——⑥の六つは鎌倉で、⑦から⑩までの四つは室町時代と思はるゝのである。

①は此の種では可なり叮嚀なもので、中央の横

向きの蓮から出た唐草に、中心飾と同じ形の花が二つと蕾が一つついてゐる。こんなに澤山に花だの蕾だのがついてゐるのはない。而も可なりよく便化されてゐるが、外側の花瓣が曲つて先が尖つてゐるところは、何だか鳥賊の口器の様で大して感心が出来ない。

⑤は拓本からかいたもので、黒くしたのでこれもまた少し變になつたが、中心の蓮は全く横を向き、兩端の卷鬚の先から小さい葉が出てゐる。唐草の形また左右等しくない。此の唐草は決してよくはないが、よく時代を現はしてゐる。

⑥に至つては瓣は三枚になつて了ひ、且つ最終の唐草の末端を巻き込む代りに先きに蕾がついてゐる。

⑦は中心飾花に子房が見え、其中に三つ迄實がある。唐草も割合によく左右の蕾も半分は開いてゐて、全體として賑かでない、死である。

⑧の中心花は大分菊花の様に見えて來た。兩方の唐草も餘り巻き過ぎてゐる様である。

⑨は餘り簡單過ぎてつまらぬが、蓮が楓の葉の様になつたところが面白い。江戸時代——明治かも知れぬ——の楓唐草はこんなところから來たらしく、其の中心飾たる楓葉はこんな蓮花が一轉したものであらう。と考へてもよからう。

⑩は五瓣で、これも蓮花とするのは少々無理かも知れぬが、遠慮せずにさう見るべきである。古いといふ丈けでつまらぬ死。

⑪も同上。此れはことによると桃山かも知れぬが、まあ室町にしておく。

⑫には少しくかくことがある。此れは中心飾が甚だ叮嚀親切で而もよく出來てゐるが、其兩方の唐草は中心から兩方に向ふのがいふ迄もなく自然であるのに、反對に兩方から中心に向ひ、且つ二重の浪に退化か進化かして、夫れに景物として水

玉迄添えてある。岐度池の中から蓮花が咲き出たところを現はしたつもりだらう、大分に意匠をこらしてある。此れは時代が室町と思はるゝので少しく都合が悪いが、併しその性質からみて蓮花唐草より第百〇三圖⑤・⑥・⑦・⑧に移り變る連鎖をなすものである事を極めて容易に看取し得るであらう。

⑨は五瓣の蓮の兩方に外を向いた餘り立派でない模様を二つくり返へし、更に少しく離れてまるで縁のない蚯蚓を一疋づつつけてあるが、これは無論ない方がいゝ。是非何かつきたいのならこの蚯蚓をやめて、も一つ同じものをつけて三つにするといくらかよくなる。兎に角この瓦は第百〇三圖⑩の仲間である。

これから第百〇三圖の右側⑪に移つていく。⑫以下⑬に至る七種は蓮花唐草の續きで、桃山及び江戸時代のものである。此の中にも拓本から寫し

たのが二つ三つあるから、現物と比べるといくらか違ふかも知れぬが、大してやかましくいふ程のことでもあるまい。

⑭から⑯迄をみると、其共通の性質は中心飾の左右に、一つは下一つは上を向いた卷鬚が出てゐることである。⑰は少し賑かだが、たゞ卷鬚が二重或は三重になつてゐる丈けの違ひである。此の七種の内、中心飾は⑱・⑲・⑳の三つが少しく異つてゐる、このうち㉑は酢漿草の様だから、何だか判らぬ㉒と共に蓮花とするのは無理かも知れぬが、これもまづ大した問題でもあるまい。あゝでもないかうでもないと考へた結果、かゝる變なものになつて了つたのであらう。また蓮は確かに蓮でもひごいになると㉓の如く逆に上からぶら下つたのがある。此れ等は瓦職人が何もわからずにとつてつけたらしい、即ち妙な形のものがどの瓦にも真ん中に上向きについてゐるから、新案か何か

のつもりで大得意で變つた模様をつけたのであらう、さうでなければ瓦の中心に蓮の花をぶら下げ理由があるまい。

要するに④以下の七種は蓮花唐草が時代が降るに従ひ如何に拙くなるかを示すために掲げたのである。

次に菊水唐草に就いて記さう(同圖左側参照)。

疏瓦では菊花紋の様なのが可なり早くからあつた、だから田舎の人等が古瓦の話をする時には、立派な蓮花瓦を菊の紋がついてゐるといふ。けれども勿論これは間違で、純粹の菊花紋は鎌倉からである。夫れと同じ様に花瓦に於いても、遺物からみると菊水唐草は鎌倉時代からである。尤も疏瓦にも菊水はある。即ち圖の上半に菊、下半に三本の平行線を一紆り紆らして流水を現はしたものをつけたので、いつ頃から始まつたものか知らぬが、古くはない様である。この疏瓦の菊水は甚だ

落つきが悪くて、文様としては少しも感服出来ぬが、これに比べると花瓦のは遙かによろしい。

⑤は中心に蓮の菊花と、其左右に第百〇二圖⑥の如く向ひ合つて四重の浪が四つ々つある。

⑥も同斷。但し左右の浪は四重のが二つ々で兩端に向ひ、其外には卷鬚の痕跡が二つ々相對してゐるのは、いくら最負目にみても貧弱と評するに仕方がない。

⑦・⑧は共に略ば同時で室町初めであらう。前者は相對せる三對の三重浪の内、最外の最上部に蚯蚓か蝸蟲かの標本を一疋づつつけてある。卷鬚の痕跡がかゝるところに残つてゐるのは洵に面白い事である。後者は無難に三對二重の浪許りであるが、左右上部三角形をなせる空地を充填するため小葉を二三つけてある。葺き上げれば見えぬところだから、これは全く餘計な事である。

⑨は上の二つよりいくらか新しい様だが、浪は

築石○敷圖 ●鑲倉時竹蓮萃唐草花貝十種

攝津・住吉 (か) 莊嚴淨土寺

●●●●
●●●●
●●●●
●●●●

王護國寺
京都・叡

太神之神宮

大和・養
濟寺

●不許複製

大和〇…吉野 (一) 金峯山寺本堂
今の本堂は繪
以前の日月草(のつた)

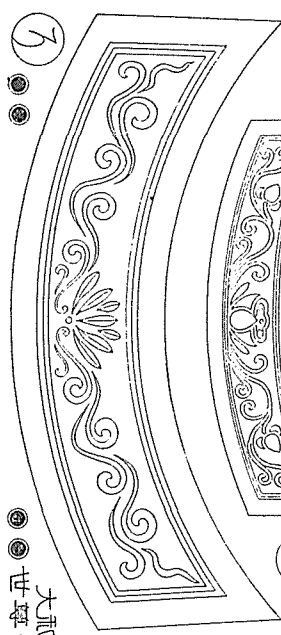
(ね) 吉野
鑲阿寺

(か) 京都
智院

(い) 珍皇寺

(ち) 津妙寺
伊

大和〇
世尊寺

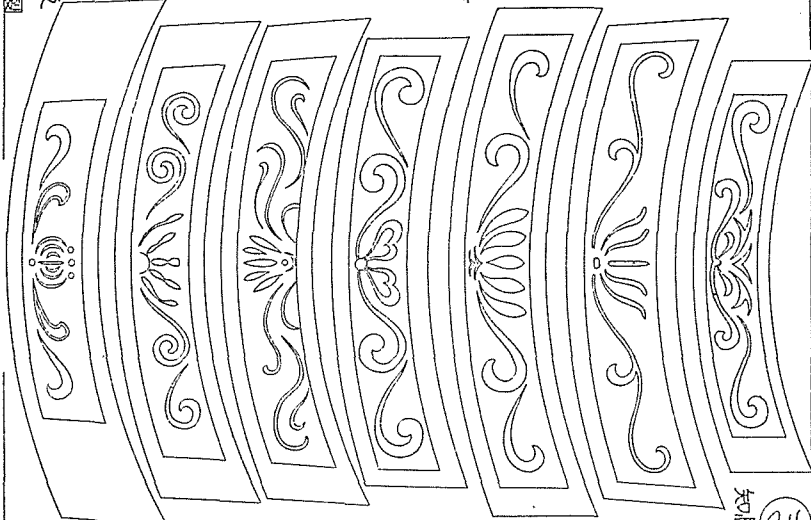


奈良市 ⑤ 興福寺



① 東福寺
 ② 同上
 ③ 法隆寺
 ④ 伏見城
 大和 凡上神宮

⑦ 知恩院

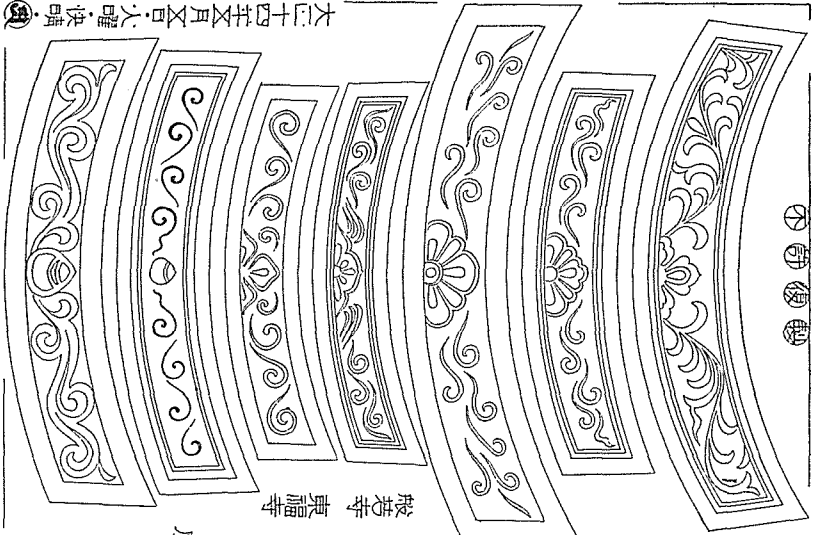


⑧ 大徳寺
 ⑨ 同上
 ⑩ 知恩院
 ⑪ 同上
 ⑫ 大徳寺
 ⑬ 同上
 ⑭ 同上

宗門 〇 參圖 鎌倉時代より 江戸時代に至る 蓮華唐草菊花具十參種

大正西曆十月十四日 〇 刊

大正十四年五月六日・快晴



⑦ 善願寺

⑧

⑨

⑩ 珍聖寺

⑪

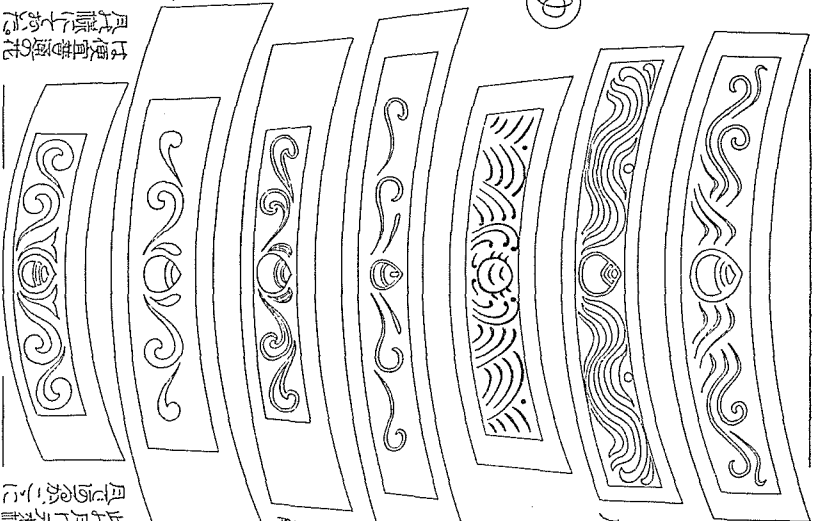
⑫

⑬ 貴福寺

⑭ 鳳凰堂

⑮

⑯ 同上



⑰ 樂師寺

⑱

⑲ 石清水(特)

⑳ 淨妙寺

㉑ 大徳寺

㉒

㉓ 慈王宮(國)

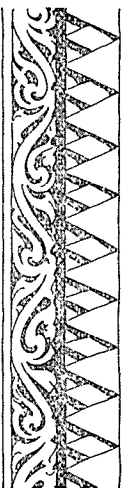
㉔ 大徳寺(門)

㉕

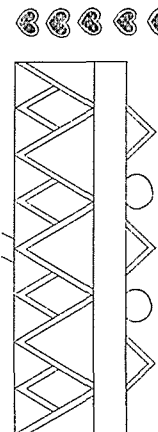
㉖ 妙心寺

㉗ 妙心寺

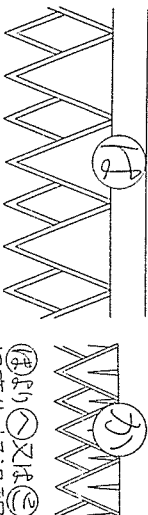
第五〇四圖 奈良時代より室町時代に至る寶相華及寶珠唐草花瓦十四種



印度國鹿野苑出土僧坊軒飾條圖

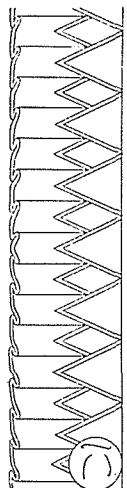


大向大佛寺第Ⅹ窟後室東壁薄肉彫刻天蓋



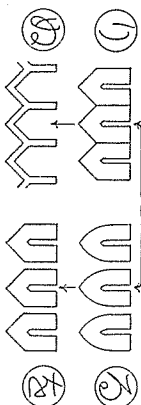
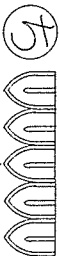
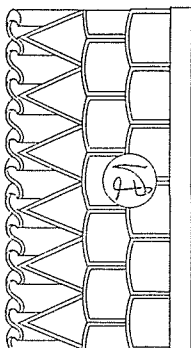
同前第Ⅹ窟内部天共一部

①より②又は③
に變化する過程
を示す想像圖



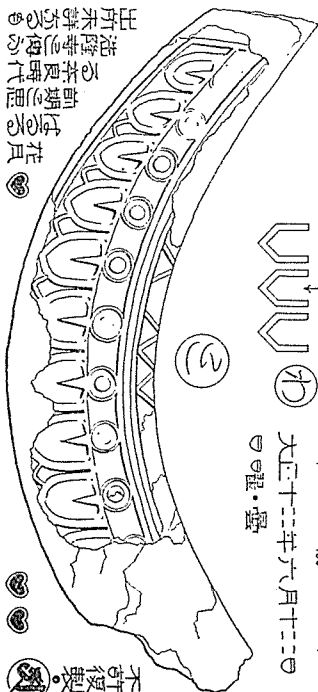
第Ⅹ窟内部追持上薄肉裝飾一部

法隆寺金堂内天蓋一部



出所未詳なるもの
法隆寺は伊代
前期に在る
もの

③



不詳複製

1/256

五脚

七脚

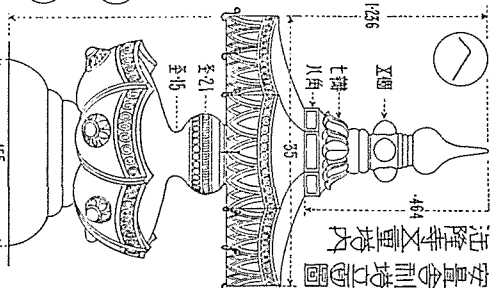
八角

35

464

法隆寺金堂内

安曇寺利持立石面圖

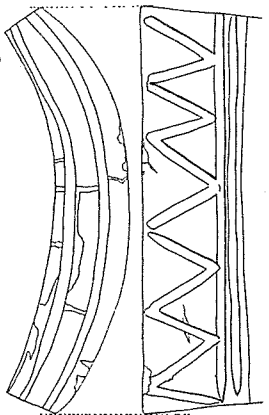


大正十一年六月十一日
明・壘

第Ⅰ〇〇圖 疊布紋より刺頭紋の變化を示す圖

種々文様瓦端及瓦上花月圖百第

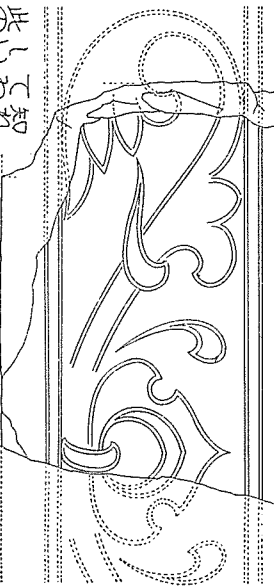
●●●●大正十三年文レ丑 五月廿日・土・雷雨 ●●●●



①・②に比へ 度半分の尺度 ③に較圖してある

花月 ●●●●
市川 ●●●●
多賀坂村大字 ●●●●
宮城縣宮城郡 ●●●●

② 法隆寺

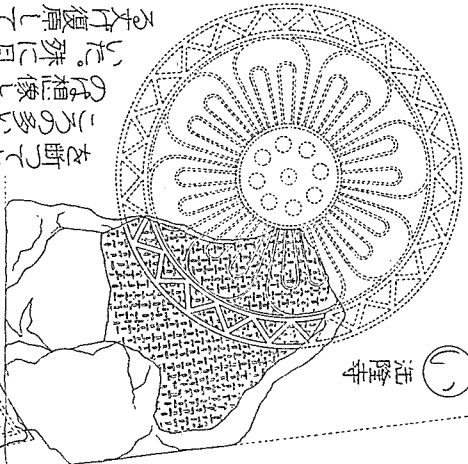


知れぬ
てなま



此の月桂に體數甚
しいからと間違つ

① 法隆寺



を斬つた
二の多し
の想像だ
だ殊に風雷
を付復して加
へての理だ
出来

は何れも破片で、た其部分だけだの判り
花・空唐草・銀齒紋草に因る。④以外の二
表面又は裏面に押だの空書にしたりした連
此の圖の目的は風雷の文様であつて、風の



不許観

菊の左右に僅に二重にある丈けで、あとは上向きと下向きとの卷鬚斗りで埋めてある。

第百〇一乃至第百〇三圖の此れ等の文様を相互に比較すると、蓮花唐草や菊水唐草の據て來るところが自然に判明するであらう。即ち此れ等の文様は相互に關係があるので、決して任意に突然と出來たものではない、といふことに歸着するのである。次の寶相花唐草また然り。併しさうではな

くて相互間何等の關係もなく、各種の文様は何れも別々に發達したものである、と考へる人があるならば、夫れは其人の勝手である。たゞ私はいろ／＼な文様を集めて並べてみると、右に記述した様に考へらるゝので、其のまゝを書きつけたのである。

そこで今度は㊸に於いて完全な正面向きの菊花となり、其兩側には葉と蕾までついてゐる。この意匠は古く鎌倉時代に既にありますが、夫れには葉丈

けで蕾はなく、且つ極く小さな模様であり、花瓣も數多く針の如くだから、夫れ等に比べるとこれは全く別種の趣がある。横向きであつた菊花を完全に正面にして、當代疏瓦の文様に於いてみるが如きものにした以上、最早浪も卷鬚もあつたものではない、直に葉と蕾とをつけて了つたのであらう。此の時代に此の位の考へを出すのは當然であるといへやう。

三、寶相花唐草

第百〇四圖㊸より㊸に至る五種。

四瓣で輪廓が菱形の花をかく名づけたので、言はゞ花菱である、其花菱の約きが中心飾となり其左右に唐草が出てゐるので、かゝる唐草は既に早く奈良時代に於いて瓦に用ひられたのである。私共は古代の裝飾文様中蓮花又は寶相花、或は一つの幹から蓮花と寶相花と出たのがある事を知つてゐる。故に奈良時代に屬すと認めらるゝ㊸の様な

花瓦の存在は當然である。寧ろ奈良時代の蓮花唐草の見出されぬ方が不思議な位である。

然るに今手元にある實例では③丈けが特に古いので、②以下④迄は何れも室町時代である様であるが、第九十八圖④が平安後期と思はるゝので、漸く前後の連絡がとれてゐるのである。だから斯かる文様は奈良から室町まであつたと見てよからう。中心飾の兩方に出てゐる唐草の性質は既に再三述べたところであるから、再び説明はかゝぬ。他の圖と比較してみれば直に判明するであらう。

四、寶珠唐草

同圖①以下九種がこれに屬する。

寶珠を花瓦の中心飾として用ひだしたのは鎌倉かららしい、少なくとも其以前の實例は未だないやうである。爰に圖示したものゝうち、一番上の①は鳳凰堂のと稱するもので、以前觀音堂の内部に積み重ねてあつたのを採り出して拓本をつくつ

ておいた、夫れから更に寫したのを掲げたから、元來まづいものが愈よ拙くなつて了つた。拓本をつくる時分には鎌倉時代と思つてゐたが、其後現物を見ぬので今みたらまた考へが異うかも知れぬが、こゝでは以前通りさうしておく。

②も亦同時に同所でもつた拓本のうつしであるが、此れと全く同意匠のが法隆寺南大門にある。此の瓦は製作年代は確かに判らぬが、法隆寺のは永享八年と十年と二度に造つたことが明らかだから、これも亦大凡其頃とみて差支あるまい。

⑦以下はこれ亦説明を加へずともよからう。時代が降るに従ひ漸く貧弱になることは他の多くの例と同じ事である。

五、劔頭紋

最後に劔頭紋の起源沿革に附て臆説を述べてみる。第百〇六圖⑤は既に第九十八圖④に掲げたのであるが、も一度此所に掲げた方が便利であるか

ら、判り易くするため再び示したのである。

扱てかゝる文様は、恰も布を疊んだ如き形をしてゐるから、假に疊布紋と呼んでおいたが、其源は遠く印度にある様である。即ち中印度の鹿野苑(Sarnath)出土の僧坊軒飾(?)に類似の文様があるからである。併しこれが果して印度で創案されたのか、或は未だ他に其もとがあるかは調べて居ないから今はかけない。

第百〇五圖㉔は即ち鹿野苑出土のものである。

去る大正十一年十二月二十八日同地へ行つたときには、かゝる文様を刻した石片が可なり多く出てゐたが、發掘したこと見えてそこいらに積んだまゝであつた。そして殆んど常に我が飛鳥時代の唐草を思はせる様なものを刻した細長い石片と一所にあつたので、見ると直に法隆寺堂塔伽藍が目の前に出て來たのであつたが、同じ意匠のものが支那にあるのは人の知るところである。即ち同圖の

㉔・㉕・㉖等は大同の石佛寺石窟内の天蓋其他建築的彫刻であるが、此のうち㉔と㉕とは㉖と同じく、㉔丈けが二重の二等邊三角形の下からきれたゝんだところが現はれてゐる。

㉕は法隆寺金堂内の天蓋の一部である。これを見ると彼との交渉を否定するわけには行かない、なせなら全然同じものであるから。そしてこれは到底暗合とは言へぬであらう。さうすると、單に此の點から丈け考へると、我が法隆寺天蓋は北魏の影響を受けた、といふよりは寧ろ北魏のまる寫しであり、も一つ其元は中印度あたりと少なくとも交渉があつたのだと思へるであらう。

㉖は法隆寺五重塔初重内部西側にある小さい舍利塔天蓋側面の模様である。この舍利塔は其全形置ランプの如く、天蓋はランプの笠の様である。其天蓋は銅板より成り、元とは其上端も側面も全部飾漆喰を塗り——色彩を塗つたのだらうが今は

剝げてゐる——文様を刻したらしいが、現在は大部分とれてゐて、たゞ僅に天蓋側面の一部に文様が残つてゐる。夫れを㊦に示したのであるが、これはどうしても㊦と連絡があらねばならぬ。この場合初めて上部に珠紋帯が出来たことも注意しておく必要がある。

此れをそつくり其まゝ貰つたのが㊦であるが、たゞ此の場合は上から下がつてゐる布の中央にてに線が一本出来た丈の差である。併しこの縦線が中々大事である。其上、㊦に於いて初めて二等邊三角形の布片は少しく左右に膨んだのであるが、夫れをも受ついで同じ様に膨んでゐる。

但しこのまゝでは布片が前後に重なり合ひ、餘り密集してゐて窮屈だから、前に出てゐるのが少しく兩方へひろがり、其間へ後ろのが出て來たとすると次の㊦が出来る。

次に㊦が少し角張り、従て内の縦線が發達して

來ると漸く劔頭紋が出来てくるが、其の進化の仕様に二種類あつて、先づ㊦が㊦又は㊦の如く變化し得るのである。そこで㊦は㊦に、㊦は㊦から㊦に、これまた易く變り得るのである。こゝに於いて眞の劔頭紋にまで進化したのである。

夫れから㊦の上端にある珠紋はさうなるかといふと、此れは前號(第百十頁)にかいた様な順序で發達してきた巴紋が、劔頭紋の間に割り込んで所謂「劔巴紋」をつくつたときに、其上部に並ぶのであつて、劔頭紋のときは珠紋は出て來ぬ様である。主として平安鎌倉に渡つて用ひられた劔頭紋及び劔巴紋の起源を右に記した様に考へてはいけなう。

二等邊三角形の飾りから、其相等しき二邊が少しく張り出し、内に一種の簡單な裝飾がついたものになる迄に、先づ以て三角形内に縦線——底邊の中央より頂點に向ひて尖れるも頂點には達せざ

る——が出来てもいゝ筈である。同圖㊦は㊧の様
な三角形が、㊨又は㊩の如くなる迄に、一度かゝ
る形をとつたどみた想像圖であるが、果してこん
な階段を経たかどうか判らぬ。

鎌倉時代末期頃に屬すと認めらるゝ花瓦に、装
飾に鋸齒紋をつけて瓦當を一つおきに上向き及び
下向きの三角形に區劃し、各區劃内即ち三角形内
に底邊中央より頂點に向ひて尖れる縦線を恰も㊪
の如くつけたのがある。各區劃は丁度正三角形の
如く、縦線も一つおきに上向き又は下向きである
から、小さな瓦だが大分見たところが珍らしく、
且つ興味のあるものである。たゞ時代の割合に新
しいのが疵で、これで奈良時代だと甚だ面白いの
であるが、措しいがこれでは仕方がない。たゞ偶
然であらうが、斯様な面白い瓦もあることを紹介
をしておく。

以上花瓦の若干につき其變遷の大體を記述した
が、要を摘んでみるゝ次の様になるであらう。

飛鳥時代に於いては左右又は四周に輪廓を設
けず、瓦當全體に模様をつけたが、奈良時代よ
りは多く四周に輪廓をつけて今日に及んだ——
尤も除外例はある——のである。併し桃山以降
のは、上下縁は普通で左右のは際立つて巾が廣
い。これは折角文様をつけても、葺き上げると
疏瓦で覆はれて見えなくなるから、夫れで省略
したことは勿論であるが、飛鳥時代又は奈良時
代の初め頃、一面につけたのと同巧異曲である
といへる。即ちどうせ見えぬのなら、態々兩方
へ縁をつけて、無理に其内に納めてしまう必要
はない。飛鳥時代の模様がつよくて力が籠つて
ゐたのは、一つはかやうな方針をやつたからと
もいへやう。其面の文様も、少なくとも唐草丈
けは終始一貫廣義に於いては一つものであり、

* * * *

其他のいろ／＼の文様は永い間に太い幹から分岐した枝葉に過ぎぬとも言へやう。

瓦當文様として面白いのは先づ室町まで、桃山以下は細くて萌の様か、左もなくば太いつまらぬ唐草である。

上端及下端文様

花瓦の上端及び下端には稀に文様がある。下端のは瓦當の直く下方で前の方に出てゐるから、葺き上げた後でも瓦座の外になるから、軒裏に立つて上を見れば見える筈である。上端の方は葺けば其上に平瓦がのつて了うから、屋根へ上つてみても判らぬのである。平瓦の下端に所謂布目をつけたり文様をつけたり文字を現はしたのは、今は問願外にしておく。

上端文様の例としては第百〇六圖^②であるが、これは奈良時代前期と認められる瓦で、大きく満開の復瓣蓮花紋と其周圍に鋸齒紋とがある。これ

は同寺出土の飛鳥時代と認めらるゝ疏瓦文様とよく似てゐるが、瓦當の夫れは一時代下げた方が適當である、だからこれも自然下がる事になる。此の蓮花が型押である以上、他にももつとこんなのが澤山なければならぬ筈なのに、この憐れな小破片のほかまだつい見當らぬ。

下端ので見える方の例としては法隆寺のど多賀城のど二つ例がある。もつと澤山あるかも知れぬが、今手元にはこの二つきりないから、こゝでは此の二例によりて記しておく。

②は所謂忍冬模様で、面白い事は面白いが餘り細くて消えかけてゐて、手にとつてみてすらよく判らぬ。私はこれが圖に記した様な唐草であることを確かめる迄に随分考へて、すり物をしたりいろ／＼して漸くこれ丈け判つたのである。これも手元にある唯一の例で、未だ曾て他に見ぬのだから、或はもつとはつきりしたのが出来たら、これ

は少し間違つてゐるかも知れぬ。

③の多賀城の例に至つては此れに反し、太い思ひ切つた線で鋸齒紋がつけてあるから、手に取つてみたのでは面白くも何ともないが、葺き上げて下から見るとこれなら見えるであらう。

故に④は姑く措き、下から見える筈の⑤と⑥とを比べてみると、裝飾としては簡單であるが多賀城のが一番いゝと思ふ。朝鮮には鳳凰に唐草をあしらつた様な随分に込み入つた美事なものもあるが、これ等は近く手に取つて鑑賞するのに適してゐるので、屋根へのせては折角の模様が見えなくなつて何もなるまい。

最後に疏瓦又は花瓦の瓦當文様の間にある極印に就て一言しておく。これは餘り古い時代にはないやうである。私はこれに就て充分調べた事がな

の蓮花紋の疏瓦周邊珠紋の間に「木」字を現はしてあるの等が元になり、鎌倉時代に主として極印が行はれたのではあるまいか。第百十三圖(此の圖は寶相華唐草の間に小さい巴紋二つと放射型紋一つとは押捺したもので、大概の場合は一つだのに、これは三つだから珍らしい、而も其巴紋はこんなに小さくても、よく時代を現はしてゐる。室町以降はついで見當らぬ。)

無論除外例があるから一概には言へぬが、瓦は各時代により其斷面なども略ぼ一定の法則によつて變るのだから、ほんとは一々夫れ等に就いても説明をしたり、圖にも記入せねばならぬのだが、餘り長くなるから一切省いておく。そして次號に於いては烏衾にうつる事にする。(大正十四年六月十二日稿了・金曜・晴)